

「今日の説教、聴き手のために」 (講壇-17) 2015/7/26 明治学院教会

『“見失った一匹”が問いかけるもの』 岩井健作 (前牧師)

聖書 マタイ 18章 10節-14節、ルカ 15章 1節-7節

「九十九匹を山に残しておいて迷い出た一匹を捜しに行かないだろうか」 マタイ 18:12

「九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで捜し回らないだろうか」 ルカ 15:4

1. 「羊飼いは」は聖書に良く出てくる話である。羊を飼う文化で生活していない我々は、想像して理解する他はない。または我々の経験に置き換えて納得するのが精一杯である。だから、聖書のテキストに向かつては、常に「謙虚」でありたい。断定的な読み込みや、型にはまった通俗的理解で、「分かった」積りになってはなるまい。「99匹と1匹の羊」の話にしても、多くの人が先入観による自分流あるいは「教会流」の解釈を抱いている様な気がする。讃美歌21-200番などもその一つであろう。
2. このイエスの譬えには、マタイ版とルカ版がある。この箇所の詳しい研究を表わした荒井献氏 (新約聖書学者) によれば、イエスの語った譬えの原形はルカの 15:4 だという。マタイは「一匹」を「迷いでた」とマイナス評価をし、99匹を「山」(エルサレムを暗示する安全な聖域)に残し(保護し)、一匹を多数の主流派の共同体につれもどすという思想である。当時の文脈でいえば、信仰の薄い「迷いでた」信徒を、99匹の迷わない教会という聖域に保護されている強い教会員のところに連れ戻すのが、牧会に専念する「羊飼いは・司牧者」の任務だという主張である。
3. ルカ版も「一匹」は悔い改めの必要のある「罪人」とマイナスの理解をするが、イエスの話の原形は99匹について、「荒れ野に放置」しても「いなくなった羊のもとに歩いてゆく」(共に荒井訳)羊飼いはイメージされている。羊飼いは羊を99匹という多数派の共同体に連れもどすことを任務とはしていない。99匹を荒野(野獣が横行する)の危険にさらしても、なお一匹に同行する羊飼いは示唆されている。ルカの場合は1節から3節までの状況設定を考えると、「99匹」とはイエスが「罪人たちを迎えて食事まで一緒にしている」ことを非難した「ファリサイ派の人々や律法学者たち」のことである。彼らを「悔い改めの必要のない正しい人」といっているが、これは皮肉を込めた批判的言辭だという(荒井)。パリサイ派など(99匹が暗示する集団)が危険と不安にさらされるように仕向けていることは失われた羊を尋ねる羊飼いは行動で示している社会批判なのである。・
4. 最近、大崎博澄さんという方の「不登校という希望」という運動の記録・論考を読んだ(雑誌『ひとりから』57号所載)。不登校の子供を学校に連れ戻すのではなく、彼/彼女が何を訴えているかを探ることに希望があるという。不登校のことは本当には研究も進んでいないという。これを読んでいて、失われた羊に同行する羊飼いを思い出した。それは、イエスの歩みと重なる。聖書の他の表現を借りれば、地上を十字架に向って旅する「神の子羊」の姿である。福音の恵みが示されている。
5. ご存じのように、私ども夫婦は、不思議な導きで、7月7日、高崎市の社会福祉法人新生会(聖公会)の老人ホームに移った。理事長原慶子さんの理念は、国の市場原理主義に流された福祉政策に強い抗議をしながら、足下では、実に丁寧に暖かく老人個人々人をケアする方針。実際に生活をはじめて見て、聞きしに優る素晴らしさである。失われた一匹の羊に同行する羊飼いは、を想像させ、同時にイエスの振る舞いを深く思わしめさせられた。